

広報
おみた
たま
第196号



小川の「祇園祭」

小川の祇園祭は1530年頃に園部城主によって始められたと伝えられています。神輿渡御、山車や獅子の巡行があり、賑やかなお囃子も響き渡ります。当家祭などの神事は小美玉市無形民俗文化財に指定されています。



今月の表紙



小川坂下青年会の会長である藤崎洋介さんと次男の虹明くん。二人のような後ろ姿がまちにあふれる日が、早く来ることを願います。



お祭りが大好きな虹明くんはお気に入りの獅子頭も一緒に持ってきてくれました。

次の世代へつなぐ

伝
統

への想い



地域のまつりや年中行事は、古くから私たちの日常と非日常のリズムを生み、住む人々に生きる活力を与えてきました。新型コロナウイルス感染症の拡大により開催が難しい中、次の世代に想いをつなぐ若者の姿がありました。



竹原の「アワアワ祇園」

江戸時代前期に園部川上流で伝染病が流行し、原因だと噂された牛ごすてんのうずてんのうの御神体の金幣ごしんたい きんぺいが園部川に流され、竹原村に流れ着き祠を建てて祀りました。御神体が寒さで「アワアワ」と震えていたとの言い伝えから「アワアワ祇園」と名づけられました。



写真・紹介文:「小美玉市体験型観光PR動画DISCOVER OMITAMA夏祭り編」より



祭りの様子が見られます！

ダイヤモンドシティ小美玉
公式YouTubeチャンネル

他にも
いろいろな
動画を
公開中！

全国的にも祭りや年中行事は後継者不足に悩みながら、伝統を絶やさぬために地域や団体が努力を重ねています。今回は小美玉にある二つの祇園祭と創作太鼓団体に焦点を当て、コロナ禍の中で奮闘する若者取材しました。

次の世代につなぐ

7月に入ると、お囃子や太鼓の音が鳴り出し、夏祭りの季節が来たと感じます。そんな毎年の風景がコロナ禍で一変しました。私たちの暮らしは大きく変わり、特に、人が集まる行事は中止や規模の縮小を余儀なくされました。地域の祭りや伝統行事などの年中行事もその影響を受けています。

コロナ禍の年中行事

祇園祭



夏の合図

「小川の祇園」は毎年7月の中旬に開催される素鷲神社の祭礼として多くの人に親しまれています。小学生の頃は夏休みが始まったその日が小川の祇園。2歳の頃から祭りに参加して、太鼓を叩きたい、笛を吹きたい、獅子を振ってみたいという想いを持ちながら、実の兄や近所のお兄さんたちに太鼓を教えてもらいました。練習が進むにつれ、祇園祭への気持ちが盛り上がっていったことを覚えています。

22歳の時に、憧れていた東京に引っ越しましたが、離れている間もときおり地元や祭りに顔を出していました。10年前に地元に戻ってきて、最初は祇園祭への参加に不安もありましたが、昔からの仲間や先輩たちが温かく迎えてくれました。改めて地元の良い、祇園祭の良さを再確認できました。

初めての試み

令和2年には自分が青年會の會長を務めていた坂下町が年番町になり、九町の青年會で組織する「大獅子會」の代表になりました。例年、大獅子會の合会は祇園祭中に行われる「大獅子パレード」の打ち合わせのみでしたが、コロナの影響で祇園祭の規模が縮小される中、代表として素鷲神社を盛り上げたいという想いが募り、初めて九町の代表を集めてパレード以外の合会を持ちました。その中で九町の代表たちも自分と同じ想いを抱いていることを知りました。

コロナ禍でも素鷲神社での神事は行われていたので、その際に九町の獅子頭を展示することを決めました。素鷲神社の宮司さんと総代長に大獅子會として展示を行いたいことを相談すると「ぜひ、やろう」と背中を押してくれました。代表を務める不安がある中で本当にうれしかったです。



小川坂下青年會會長・大獅子會代表
ふじさき ようすけ
藤崎 洋介 さん (39歳)

受け継ぐ思いを次の世代へ

息子は1歳の頃からベビーカーに乗って祇園祭に参加しています。獅子を通る場所を散歩すると祭りを思い出して「ここに獅子があるよ」と話してきます。息子のためにも、祇園祭をやりたいという気持ちは大きいです。自分が子どもの頃感じたことや教えてもらったことを次の世代に伝えたいです。



令和3年に初めて行った獅子頭の展示

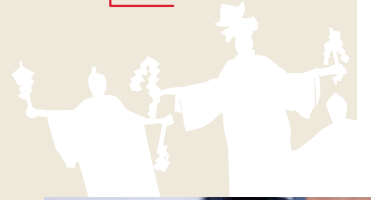


上:父と子の祭りの支度
下:取材協力:Dins, C(デ イブス カフェ) 田木谷259-3



祇園祭の写真を見ながら伝統への想いを語ってくれました。(左:平成15年、右:令和元年)

アワアワ祇園



祇園を通して大人を知る

竹原アワアワ祇園では、5町(上町・横町・仲町・裏町・坂下)で御神輿おみこしを回し、上町と坂下の子ども会が「子ども獅子」を行っています。自身も小学1年生の頃に初めて参加して、小さな太鼓から始まり高学年になると大きな太鼓を叩いています。当時は子どもがたくさんいて活気がありました。6月に入ると練習が始まり、地域の大人に教えてもらい、練習を通して大人たちと顔見知りになっていったのをよく覚えていま

麦のわらを燃やす、非日常感

神様を暖めるために各家の前にある麦藁むぎわらを燃やすのが竹原アワアワ祇園の特徴です。早すぎず、遅すぎずに燃やすタイミングが大切。藁が燃えさかる中を御神輿おみこしが通る様子は非日常感にあふれていて好きな場面です。

ふるさとを離れて知った現状

大学進学とともに地元を離れ、28歳の時に家業の仕事を継ぐために地元へ戻り、上町青年部に入りました。久しぶりの祭りは自分が子どもの頃に体験した祭りとは違って驚きました。御神輿おみこしを担ぐ人や子どもが少なかったからです。上町の子ども会だけでは子ども獅子が行うことができず、他の町内に声をかけて子ども会に入ってもらいました。また、子ども獅子を動かす時も上町青年部が協力してくれています。こうした現状に、祭りを続けられるのかという危機感を感じています。

色褪せない体験

コロナ禍により、祭りが開催できていない状況は、子どもたちの中で祭りを体験できない空白の期間ができてしまうということ。祭りは夏の風物詩です。現代の子どもたちには遊



竹原上町青年部役員・子ども会会長
にいほり かづひこ
新堀 一彦さん (40歳)

ぶツールがたくさんあります。しかし、汗をかいて練習して、当日に向けた高揚感や祭りでしか味わえない体験です。地元で祭りがあつたことを体験してもらうことが、地域の伝統を次の世代につないでいくために大切だと思えます。子どもが少ない状況を変えるのは難しいですが、だからこそ、いつでも始められるような体制にしておくこと、それが今の自分の目標です。



ひびき かい
長男の日々樹くん(右)と次男の佳生くん(左)



子ども獅子で太鼓を叩く長男の日々樹くん(右)



燃やした藁の上を歩く御神輿

コロナ禍から次のステージへ

響鳴太鼓まつり

～ 銀河の向日へ～



日本の伝統楽器「和太鼓」。その歴史は古く、日本を代表する伝統楽器とされています。小美玉市には「創作太鼓」という形で和太鼓に情熱を傾ける「創作和太鼓集団みのり太鼓」「小川太鼓」「玉里創作太鼓」という3つの太鼓団体があります。今回、コロナ禍の中で「小川太鼓」と「玉里創作太鼓」の有志による「響鳴太鼓まつり実行委員会」が立ち上がり、6月5日(日)に「響鳴太鼓まつり～銀河の向日へ～」が開催されました。その委員会の中心を担う、「玉里創作太鼓」の若き太鼓打ちに伝統楽器である「和太鼓」への思い、そして次の世代への想いを聞きました。

写真提供:響鳴太鼓まつり実行委員会



子どもたちの成長の場をつくる



響鳴太鼓まつり実行委員・玉里創作太鼓会員

こだま まさひこ
児玉 将彦さん (30歳)

小学5年生の時に玉里創作太鼓が学校に演奏に来て、体育館に響き渡った和太鼓の音に惚れて入団を決意しました。平成16年に入団してからこれまで、周りの大人たちから学び、時には助けてもらいながらここまでやってきました。

コロナ禍により公演の自粛が続く中で、新しい和太鼓の祭りを作りたいという想いが募りました。公演は一人ではできません。大変なのは承知でしたが、「小川太鼓」の浅野彩夏さんと一緒にそれぞれの団体のまとめ役の人たちに相談しながら、有志による実行委員会を立ち上げました。公演後、お客様から「今後もやってほしい」という声をいただき、開催して本当に良かったと感じました。今回の公演で自分のテーマは運営側を頑張りたいから、子どもたちの成長の場をつくることでした。和太鼓は人を育てます。子どもたちに太鼓の楽しさ、和太鼓の良さ、曲の良さを伝えることが次の世代につながるために大切だと思っています。受験などの理由で太鼓から離れた子がまた戻ってきてくれることが何よりうれしく、想いを伝えた結果だと思っています。



生涯学習課で文化財係を担当する本田信之さん

小美玉の伝統と年中行事

広報おみたま「小美玉市の歴史を知ろう」のコーナーで小美玉の歴史を伝えている市職員の学芸員に市内の伝統行事の継承について聞いてみました。

私たちの身近にある伝統文化は、さまざまな時代背景や人と人の関わりの中で生み出され、今まで伝え守られてきた「みんなの財産」と言ってもいいかもしれません。しかし、近年、少子高齢化や生活スタイルの変化により、次の世代に伝えることが難しくなっています。さらに昨今のコロナ禍はそれに拍車をかけています。

市内では特色のある盆行事として「盆綱ほんづな」がいくつかの地区で行われています。茨城県内では霞ヶ浦と北浦周辺、酒沼

と酒沼川流域、牛久沼や小貝川流域などに限られ、小美玉市では他の市町村よりも多くの地区で行われています。盆綱は子どもたちが藁で作った綱を引いて墓地と家々との間を歩き、お盆にご先祖様の霊を送迎するもので、担い手は「子どもたち」です。こうした伝統文化を伝えることは、子どもたちを中心とした世代間の交流が盛んになり、地域づくりにも役立つ側面もあります。そうした意味でも次の世代に伝統を伝えることは大切だと思います。

伝統の継承が地域づくりの一助に



上馬場区で行われている盆綱。地域の大人が作製し、子どもたちが墓地まで運ぶ。こうした伝統行事もコロナ禍で開催見送りや規模縮小の状況が続いている。



小美玉市の下馬場区にある鹿嶋神社や小川の祇園祭で使用される御神輿や踊屋台など、神社や祭礼に関係する建築を手がけた大工棟梁の「雨ヶ谷八十吉」。今年生誕150年にあたり、その節目に八十吉が手掛けた神社と祭礼の建築に焦点をあてた参考展が、小川資料館で開催されます。

生誕150周年

小川資料館参考展
小川で
受け継がれる
神社と祭礼
大工棟梁 雨ヶ谷八十吉

入場無料

令和4年
開催期間 7月9日(土) - 8月28日(日)
開館時間は9:30から18:00まで
※7月18日、8月11、13、14日は17:00まで

会場 小美玉市小川資料館 展示室 (小川図書館2階)
休館日は月曜日(7月18日は開館)と7月19、29日
小美玉市小川1664-2 ☎0299-58-5828

会期中に素鷲神社祇園祭のDVDを上映します。

7月16日(土)、24日(日) 各日とも11時と14時に上映します。
8月 7日(日)、27日(土)

担当
しています



小川資料館職員のと和久法子さん

歴史だけでなく、そこに関わった人たちの想いがあるからこそ伝統が繋がっていると思えます。会期中は10年ほど前に撮影された素鷲神社祇園祭のDVDを上映します。コロナ禍で祭礼の規模は縮小されていますが、足を運んで、伝統の一端を感じてみてください。